

# 11th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association (IHPBA)



松清 大

東邦大学医学部外科学講座一般・消化器外科学分野（大橋）

肝胆膵外科領域における大国際学会である 11th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association (IHPBA) in Seoul に参加する機会に恵まれたので報告する。

11th IHPBA は東京で桜の開花宣言が告げられた頃の 2014 年 3 月 22～27 日の期間、大韓民国のソウルで開催された。ソウルはご存知のとおり、三星（サムスン）グループや現代（ヒュンダイ）グループを要する大韓民国の首都である。アメリカのシンクタンクが公表したビジネス・人材・文化・政治などを対象とした総合的な世界都市指数（2012 年 4 月）にて世界第 8 位の都市と評されている（ちなみに東京はニューヨーク、ロンドン、パリに次いで第 4 位である）。東京より緯度が高く、入国する前は寒いと聞いていたが実際は東京同様で爽やかな気候であった。

大橋病院外科肝胆膵班からは准教授の渡邊 学先生はじめ、講師浅井浩司先生、助教齋藤智明先生、研修医鯨岡 学先生（現当外科後期研修医）と筆者が参加した。筆者は「同時性肝転移を伴った閉塞性大腸癌に対する大腸ステントを用いた治療戦略とその検討」について発表したが、国際学会での発表は非常に緊張するものである。それに比べ鯨岡学先生は研修医でありながら堂々としていたことに驚きを感じるとともに、若い時分から大きな経験の重要性を肌で感じた瞬間でもあった。

肝胆膵外科の領域でも急速に腹腔鏡外科の症例が増えており、それは日本のみならず世界でも同様である。肝門部胆管癌に対する腹腔鏡下系統的拡大肝切除胆管空腸吻合再建や膵頭部領域悪性腫瘍に対する腹腔鏡下膵頭十二指腸切除術は 10 年前には世界の中でも極少数の外科医のみが行っていた手術であった。しかし、現在では世界中の多くの外科医がその技術を修得すべく毎日研鑽の日々を送って



学会会場入口の著者



生ける伝説 Prof. Bithmuth と、  
左から筆者、Prof. Bithmuth、浅井講師、齋藤医師

おり、本学会でも多くの高難度の腹腔鏡手術が発表されていた。また、その中でも卓越した技術を持つのはどのセッ



左：サムゲタン（参鶏湯）を食す。齋藤医師（左）と鯨岡医師（右）  
右：日本の生ける伝説外科医二村教授と。

ションでも日本人外科医であったことが筆者にとって印象的であった。国内外の学会で活躍されているそのような他施設の日本人外科医は常に取り巻きが多く、日本では「お近づき」になりにくい。しかし、国際学会では日本人外科医の数は減り、「お近づき」になるには最高のチャンスがある。そういった先生方も Team Japan として筆者らを快く受け入れてくださるだけでなく、酒を交えて話し合い、楽しい世間話から最先端の肝胆膵外科手術の技術まで十分すぎる時間を一緒にさせていただける。もちろん、海外の先生方とも各国、各施設での違う考え方や技術について多く



渡邊准教授と筆者

のディスカッションをすることができる。日本や世界の目下活躍中の外科医と“お友達”になることができるのである。それこそ国際学会参加の醍醐味ではないかと筆者は考えている。

もちろん、われわれ外科医は技術を向上させ競い合うのが目的ではない。その技術を苦しむ患者に活かしてこそ外科医である。こういった国際学会に参加する機会を与えていただくことでレベルアップを図り、日々研鑽することで大橋病院の理念でもある「優しい心、親切な心のこもった医療の実践」が遂行できる1つの方法ではないかと考えている。